



Title	クリニカル移植コーディネーターの専門的実践
Author(s)	萩原, 邦子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69478
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (萩 原 邦 子)	
論文題名	クリニカル移植コーディネーターの専門的実践

I. 研究の背景

日本では、2011年にレシピエント移植コーディネーターの認定制度が開始され、現在百数十名が認定されている。その8割以上が看護師であるが、欧米と比しその歴史は浅く、担う役割も異なっている現状がある。2004年に日本看護協会では、クリニカル移植コーディネーター（以下CTC）を移植医療に関する最新の多様な専門的知識と高度なスキルを備え、移植の全過程において対象となる人々が最良の移植医療が受けられるよう調整する役割を自律的に遂行する看護師と定義したが、実際に日本で移植医療に関わる看護師の実践やその看護の専門性を明らかにした研究はこれまで見られなかった。そこで本研究は、経験豊富な認定レシピエント移植コーディネーターの看護師の実践から、CTCの専門的実践を明らかにすることを目的とした。

II. 研究1：クリニカル移植コーディネーターの専門的実践

1. 研究目的

経験豊富な認定レシピエント移植コーディネーターの実践から、CTCに共通した専門的実践を明らかにする。

2. 研究方法

1) 対象：看護師の認定レシピエント移植コーディネーターで、コーディネーターとして5年以上の経験と専任もしくは専従であることを条件とした。

2) データ収集方法：個別の半構造化インタビュー法を実施し、調査期間は2013年1月～2014年12月であった。

3) 分析方法：録音した面接の会話内容を逐語録とし、木下が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach、M-GTA）を用いて分析した。

4) 倫理的配慮：研究の目的、自由意志による参加や個人情報保護を、文書を用いて説明し署名による同意を得た。大阪大学医学系研究科倫理審査及び大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を得て行った。

3. 結果

1) 対象：11名を対象とし、看護師歴の平均は21.4年、コーディネーターとしての経験年数は平均10.3年であった。

2) 専門的実践を構成するカテゴリーと概念：49の概念から構成される14のカテゴリーを得た。【本音をとらえる観察】【相手に歩み寄る意識的なコミュニケーション】【相手の反応に応じた流れのあるコミュニケーション】【患者・家族が移植後に後悔しないことを目指す関わり】【自己決定のプロセスに寄り添い決定した意思を支え擁護を貫く】【患者の状況をアセスメントしながらの自律した判断とタイムリーな対応】【状況の変化に対応したコーディネーション】【チーム医療を意識したケアの協働】【医師とのアサーティブなコミュニケーション】【患者・家族と医療者の信頼関係構築を目指す仲介】【永遠のプライマリーとしての長期継続するケア】【指導のタイミングを捉えセルフモニタリングを促す】【問題解決のためには一歩踏み込む】【自らの能力を適切に評価し謙虚な姿勢で臨む】と命名した。

4. 考察

日本のCTCは、移植選択での意思決定支援で【本音をとらえる観察力】や【患者・家族が移植後に後悔しないことを目指す関わり】など、移植に対する患者や家族の真意を探り、患者および生体ドナー候補者の擁護者として関わる高い倫理性が求められる実践を行っていたと考えられた。移植プロセスでのコーディネーションにおける【患者の状況をアセスメントしながらの自律した判断とタイムリーな対応】は看護師としての医学知識を駆使し自律した判断を必要とされる実践であり、【状況の変化に対応したコーディネーション】は移植プロセス全体を俯瞰して状

況を把握し危機管理能力を発揮した調整能力が求められる実践を行っていたと考えられた。【チーム医療を意識したケア】や【患者・家族と医療者の信頼関係構築を目指す仲介】においても多職種チーム内での優れた調整能力が求められる実践を行っていたと考えられた。

Ⅲ. 研究2：肝移植および腎移植の臨床移植コーディネーターの専門的実践の特徴

1. 研究目的

日本で移植数の多い肝臓移植と腎臓移植のCTCの専門的実践の特徴を明らかにする。

2. 研究方法

1) 対象：研究1の対象者のうち、肝臓移植及び腎臓移植を担当する専従の認定レシピエント移植コーディネーターの中で、実践の語りの内容が移植各期に亘り網羅していたデータを対象とした

2) データ収集方法：研究1と同様で、上記対象者の中で肝臓移植と腎臓移植それぞれ1名のデータを用いた。

3) 分析方法：各対象者のデータを、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。

3. 結果

2) 肝臓移植CTCの専門的実践の全体像：分析の結果【意思決定支援：家族全体を捉えてアセスメントし本音を引き出すコミュニケーション方法と患者やドナーが傷つかないような配慮の実践】【コーディネーター独特の実践：指示を待たずに自ら行動し、医師への尊重を示して患者が安心して医療を受けられるようにする】【患者家族との関係の構築：患者家族の深い部分に関わることによる本音で向き合える関係の構築】【退院後の実践：患者の体調管理のみならず人生に寄り添った相談窓口としての役割】【コーディネーターとしてのやりがい：チーム医療実践の実感と看護師経験を活かした移植患者との長期にわたった深い関わり】【コーディネーターの苦悩：身分や環境の保証が不十分で、孤独と重い責任の中で、常に満足出来ない実践を自問自答している】の6つのシンボルマークが示された。

2) 腎臓移植CTCの専門的実践の全体像：分析の結果【慢性腎臓病のステージ全てに関わる看護の提供：移植前から長期継続ケアを、透析看護師とも連携して行う】【意思決定支援：患者が病気を受け入れた上で家族と共に考慮する移植選択を寄り添い支える】【セルフマネジメント支援：セルフモニタリングの意義の理解を促し、時期のタイミングやポイントを押さえた指導】【コーディネーション：移植プロセスを把握し、相手の状況やタイミングを図ったアプローチを駆使し、アサーティブなコミュニケーションを行う】【チーム・コミュニケーションの促進：医師と患者・医療スタッフとの治療方針の共有認識を促すことで目指すより良い医療】【チーム・ビルディングの促進：医療者それぞれの専門性の発揮を促し、移植医療の質向上を目指す】の6つのシンボルマークが示された。

4. 考察

肝臓移植CTCは【意思決定支援：家族全体を捉えてアセスメントし本音を引き出すコミュニケーション方法と患者やドナーが傷つかないような配慮の実践】において、レシピエントの生死に関わるシビアな選択を行うドナー候補者の意思決定を支えるための擁護者としての関わる倫理実践を意識的に行っていたことが特徴であると考えられた。腎臓移植CTCは【慢性腎臓病のステージ全てに関わる看護の提供：移植前から長期継続ケアを、透析看護師とも連携して行う】実践において、透析治療から腎移植そして透析再導入も含めた慢性腎臓病の全ステージに関わることの重要性を認識したケアの実践が特徴であると考えられた。これらのことから、臓器移植の特性によりCTCの中心となる課題が異なることが示唆された。

V. 結語

CTCの専門的実践について、49の概念から構成される14のカテゴリーの実践が明らかになった。また、肝臓移植と腎臓移植のCTCの専門的実践からは各6個のシンボルマークが示され、それぞれの特徴が明らかになった。CTCの専門的実践は高度な看護実践と優れた調整能力が求められる実践であった。本研究結果は現任CTCの質評価に用いることやCTCの実践能力の評価指標の開発にも有用であると考えられた。肝臓および腎臓移植CTCの特徴から、各臓器移植CTCの中心となる課題が異なることが示唆された。CTCの共通した実践を軸に実践能力を高める教育を基本とした上で、各臓器移植CTCの実践の特徴も考慮に入れた視点も取り入れる必要があると考えられた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 （萩原 邦子）			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	清 水 安 子
	副 査	教授	梅 下 浩 司
	副 査	教授	遠 藤 淑 美
	副 査	招聘教授	瀬 戸 奈 津 子

論文審査の結果の要旨

I. 研究の背景

1997年に臓器移植法が成立して以降、日本でも脳死及び心停止ドナーからの移植件数は増加傾向にあり、移植医療を行う上で、移植コーディネーターは重要な役割を果たしている。移植コーディネーターは、当初、各施設で独自に雇用され、医療資格のない者もその役割を担っていた歴史的背景から、2011年に始まった認定レシピエント移植コーディネーターの資格においても設立当初は様々な職種が受験できる制度であった。しかし、その役割の重要性から、2015年からの新規申請は医師、看護師のみに限られることとなった現状がある。

2004年に日本看護協会は、「移植医療に関する最新の多様な専門的知識と高度なスキルを備え、移植の全過程において対象となる人々が最良の移植医療が受けられるよう調整する役割を自律的に遂行する看護師」を臨床移植コーディネーター（以下、CTCと略す）と定義したが、日本では公式な認定資格は存在しないため、現状では認定レシピエント移植コーディネーターの資格をもつ看護師が、CTCとしての役割を担う必要があると考えられる。

しかし、移植医療の歴史の浅い日本では、CTCとしての看護師の役割の重要性はあまり認識されていない現状があり（志自岐 2007）、実際に日本で移植医療に関わる看護師の実践やその専門性を明らかにした研究はこれまで見られなかった。そこで、本研究は、CTCとしての役割を担う看護師が、どのような実践を行っているかを明らかにすることによって、看護職間あるいは、多職種との連携がよりスムーズになったり、必要な役割が明確になることでCTCの実践能力育成にも役立てられるのではないかと考え、CTCの専門的実践を明らかにすることを目的とした。

II. 研究 1

1. 研究目的：CTCの専門的実践の全体像をプロセスとして明らかにすること

2. 研究方法

1) 対象：認定レシピエント移植コーディネーターの看護師で、コーディネーターとして5年以上の経験と専任もしくは専従であることを条件とした。

2) データ収集方法：個別の半構造化インタビュー法を実施し、調査期間は2013年1月～2014年12月であった。

3) 分析方法：録音した面接の会話内容を逐語録とし、木下が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach、M-GTA）を用いて分析した。

4) 倫理的配慮：研究の目的、自由意志による参加や個人情報保護を、文書を用いて説明し署名による同意を得た、大阪大学医学系研究科倫理審査及び大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を得て行った。

3. 結果

1) 対象：11名を対象とし、看護師歴の平均は21年、コーディネーターの経験年数は平均10年であった。

2) CTCの専門的実践を構成するカテゴリーと概念：49の概念から構成される14のカテゴリーを得た。移植選択場面での意思決定支援における実践では、【本音をとらえる観察】【患者・家族が移植後に後悔しないことを目指す関わり】【自己決定のプロセスに寄り添い決定した意思を支え擁護を貫く】などが、移植プロセスでのコーディネーションにおける実践では、【患者の状況をアセスメントしながらの自律した判断とタイムリーな対応】【チーム医療を意識したケアの協働】などが、長期継続ケアにおける実践では、【永遠のプライマリーとして長期継続するケア】【指導のタイミングを捉えセルフモニタリングを促す】などが明らかとなり、全過程におけるCTCとしての姿勢では、【問題解決のためには一歩踏み込む】【自らの能力を適切に評価し、謙虚な姿勢で臨む】というカテゴリーが明らかとなった。

Ⅲ. 研究2

1. 研究目的：肝移植および腎移植の臨床移植コーディネーターの専門的実践の特徴を明らかにすること

2. 研究方法

1) 対象者とデータ収集：研究1で収集したデータのうち、肝臓移植及び腎臓移植のCTCの逐語録を使用。

2) 分析方法：録音した面接の会話内容を逐語録とし、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。

3. 結果

1) 肝臓移植CTCの専門的実践：分析の結果、6つのシンボルマークが明らかとなり、中でも【意思決定支援：家族全体を捉えてアセスメントし本音を引き出すコミュニケーション方法と患者やドナーが傷つかないような配慮の実践】【コーディネーターの苦悩：身分や環境の保証が不十分で、孤独と重い責任の中で、常に満足出来ない実践を自問自答している】が特徴的であった。

2) 腎臓移植CTCの専門的実践：分析の結果、6つのシンボルマークが明らかとなり、中でも【慢性腎臓病のステージ全てに関わる看護の提供：移植前から長期継続ケアを、透析看護師とも連携して行う】【意思決定支援：患者が病気を受け入れた上で家族と共に考慮する移植選択を寄り添い支える】が特徴的であった。

Ⅳ. 総合考察

移植選択における意思決定支援では、CTCは移植特有の倫理的ジレンマを抱えながらも、患者・家族が移植後に後悔しないことを目指す支援や意思決定を支え擁護する関わりなどを行っており、高い倫理性が求められる実践であると考えられた。また、移植プロセスのコーディネーションでは、自律した判断が求められることが明らかとなったが、これには、医学的知識に基づいた根拠や論理性がなければ、多職種の納得は得られない。さらに、看護専門職としてのキュアとケアの融合も求められる高度な実践であると考えられた。

また、肝臓および腎臓移植CTCの特徴から、各臓器移植CTCの実践は、治療全体の中での移植医療の位置づけの違いによって、支援のあり方が異なることが考えられた。CTCの共通した実践を軸に実践能力を高める教育は必要であるが、それと共に各臓器移植CTCの実践の特徴も考慮に入れた視点も教育内容に盛り込む必要があると考えられた。

本研究によりCTCの専門的実践を明らかにしたことで、CTCの様々な職種との連携のあり方や、CTCの実践能力向上に向けた教育のあり方や教育内容を検討する上で、基盤となる知見を得ることが出来き、移植医療の発展に寄与する結果と言え、博士（看護学）の授与に値すると評価する。